

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Hans-Peter Blossfeld and Andreas Timm (eds.)

*Who Marries Whom? Educational Systems as Marriage Markets in Modern Societies*

Dordrecht, Kluwer Academic Publishers, 2003, pp.xii+342

本書は教育が配偶者選択において果たす役割についての国際比較研究で、15個の章から構成されている。婚姻関係を配偶者の組合せから見ると、同じ社会的属性をもった者同士が結婚する「同類婚」と異なった社会的属性をもった者同士が結婚する「異類婚（上昇婚や下降婚）」に分けることができる。本書では、こうした同類婚や異類婚が選択されるプロセスにおいて、教育がどのような影響を及ぼしているかが検討されている。そして国際比較の対象となっているのは、ドイツ、ベルギー、フランス、オランダ、イタリア、スペイン、イギリス、アメリカ、デンマーク、スウェーデン、ハンガリー、スロベニア、イスラエルの13カ国である。

本書では、まず第1章において本書全体の分析枠組が提示されている。ここでは、異類婚、同類婚と教育の関係が二つの視点から検討されている。まず第一番目は、結婚市場における教育（学歴）の果たす役割である。すなわち、先進諸国では大学進学率の上昇に見られるように高学歴化が進行している。特に女性の進学率の増大が顕著であり、進学率の男女差が次第に縮小しつつある。こうした教育システムの拡大による高学歴化が配偶者の組合せに対してどのような影響を及ぼしているかが一つの視点として検討されている。第二番目は親の学歴が配偶者選択に与える影響である。現代社会においては、arranged marriageはほとんど行われず、配偶者選択は、通常、当事者の自由な意志選択に基づいて行われる。こうした自由意志によるパートナー選択を原則とする現代社会において、親の学歴というバックグラウンド要因が配偶者の組合せに、どのような影響を与えているかが二つめの視点として検討されている。

第2章から第14章までは、第1章で示された二つの視点についての実証分析になり、各章に一カ国の割合でイベント・ヒストリー分析を使った検討が行われている。これらの章ではそれぞれの国の分析モデルで用いられる共変量がほぼ同じであり、分析結果の国際比較が分かりやすい構成になっている。そして、最後の第15章では、本書全体のまとめとして、各国の分析結果が総括されている。

本書の分析結果によれば、第一に、分析対象国のうち8カ国で同類婚の割合が増大し、異類婚の割合が減少する傾向が見られた。特に、異類婚の中でも女性の上昇婚の減少が顕著であった。すなわち、教育システムが拡大するにつれて、男女の進学率の格差が次第に縮小し、結婚市場において男女の学歴水準が次第に同質化していく。この結果、同じ教育レベルの配偶者を選択することが容易になり、同類婚の割合が増大したと本書では説明されている。また、女性の高学歴化による賃金稼働力の上昇は、男性の Breadwinner としての役割を相対的に弱める結果になり、女性が上昇婚をする必要性が低下したことも異類婚の減少の背景にはあると指摘されている。第二に、親の学歴の影響については、子どもの学歴が父親の学歴よりも低い場合には、子どもは上昇婚をするケースが多く、観察された。反対に、子どもの学歴が父親の学歴よりも高い場合には子どもは下降婚をする場合が多かった。すなわち、父親と子どもの教育水準が異なっている場合には父親の学歴に近い配偶者を子どもは選択する傾向が見られた。従って、出身家族のバックグラウンド要因は配偶者の選択に依然として影響力を持っていることになる。

本書の長所は、共通の分析枠組に沿って国際比較を行うことで、結果の比較が容易になっている点である。しかし、分析枠組が共通であるが故にかえって国ごとの特殊要因の分析が行われず、こうした要因の影響の吟味ができなくなるという短所も併せ持っている。とは言え、配偶者選択のパターンについての国際比較研究はこれまで充分に行われてはならず、本書は一読の価値がある研究書と言える。（福田亘孝）